

水げん通信

サンズ [SONS : Sources of New Streams]

水かおる早良区

“心地よい時間”の流れるまちづくり

第10号 2009年 秋号

玉井てるひろ

〒814-0171 福岡市早良区野芥 3-26-7

TEL.092-405-3000 FAX.092-405-3001

E-mail : ttamai@ray.ocn.ne.jp

URL : http://www.heartfultime.com

発行者：福岡市議会議員 玉井輝大

福岡市議会議員 玉井輝大

よろしくお願いたします。

8月に入部校区に引越しました。早良区南部の住民として、早良区発展のために、一層頑張ってくださいと思います。

“物語”を紡ぐ

2009年9月28日、西日本新聞、「潮流」というコラムで哲学者内山節さんは、今回の衆議院選挙の自民党敗北を、「この2、30年の間に、日本の人々の考え方や行動が少しずつ変化して来た」からだ、として、二つの変化に焦点を当てています。

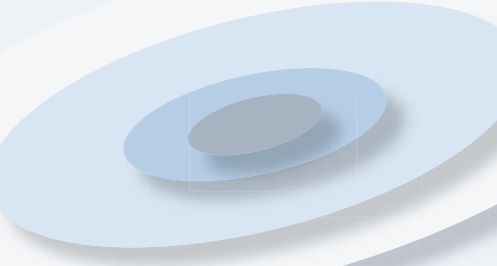
まず、「環境問題への関心の高まり」で、「経済の力は必要かもしれないが、それだけでは社会の持続は保障できないし、私たちが幸せになれるのではないか」という思いが、少しずつ広がっていった。」次は、「孤立した個人の社会から協力し合う社会への、私たちの社会目標が変わってきたこと。」この2つが、今回の選挙結果を生み出したと。

「経済発展、グローバリズムといった『大きな物語』に翻弄される生き方を、人々は修正し始めていた。自然との関係や人間同士の関係から生まれる『小さな物語』を大事にしなが、しかし小さな世界に閉じこめるのではなく、自分が結び合っている世界を通して大きな世界をもとらえていくという、新しい知の作法が生まれ始めていた。」内山さんは「大きな物語」に対して「小さな物語」に焦点を当てています。

2009年7月7日、西日本新聞、九州大学准教授 施光恒さんの「村上春樹『1Q84』を読む『物語』の力」回復する試み」でも、「物語」が語られます。「人は皆、世界は国の成り立ちや自分自身を理解するときに、半ば無意識に「物語」という形式を用いる。世界や国の歴史という大きな「物語」の中に、

自分の来歴を重ね、人生を小さいながらも一つの整合性を持った「物語」にしようと努める。また人と人との強い絆をつくるのも「物語」である。「物語」の多くの人々による共有——歴史的記憶の共有——が社会や国家をつくる。個人的な「物語」の重ね合わせが、人と人との親密な関係をもたらす。」

そして、村上春樹の「1Q84」に入っていく、「村上は、「物語」作りの原初形態を描き出し、現代人の「物語」の能力の回復を図ろうとしている。繰り返し登場する『リトル・ピープル』は、人々に「物



語」作りを促す太古から存在する自然的力の象徴だと理解できる。(中略) 自己の内面と他者の存在に向き合い、真摯に、丁寧に、ささやかながらも各自が「物語」の糸を紡いでいくこと。『リトル・ピープル』は善でも悪でもあり得るとされているように、「物語」を紡ぐ営みがうまくいくとは限らない。しかし現代人にとっても、自己を確立し、他者との繋がりを回復していくためには、そうした原初的方法しかない。」

戦前の大政翼賛会。戦後の大衆文化。マイケルジャクソンに象徴されるスーパー・スター。ジョージ・オーエルが妄想したビッグブラザーの1984年頃までは、確かに、大きな「物語」が支配していました。

そのころ出されたアルビン・トフラーが予言した情報化の波「第三の波」。90年代は、本格的IT革命の伸展、インターネット環境の整備が図られました。21世紀に入り、プログ、さらに、ツイッターと私たちは、自分で多様な情報にアクセスし、自分で世界に「物語」れる時代に入っていました。

施先生は「人類は、太古には呪術という形式で、またもう少し後にはシャーマン(巫女)を介して、「物語」を作り、世界や自分を理解しようと努めてきた。」と言っています。河童も日本人が太古からの小さな「物語」として、つくりだしてきたのでしょうか? カッパ塾(九州政治哲学塾)では、これからの政治哲学づくりのため、私たちの「言葉採取」を始めています。さらに、それを一歩進めて「物語」として紡ぐ」という、新たな目標を気づかせていただきました。

「人と人との強い絆をつくるのも「物語」である。「物語」の多くの人々による共有が社会や国家をつくる。個人的な物語の重ね合わせが、人と人との親密な関係をもたらす。」

● 市政相談タイム

市政のことでお困りのことや、ご意見をお持ちのことはありませんか?

下記の時間と場所で、予約なしでご相談を承っています。どんなことでも、何人でも玉井と話しにお越しください。

■時間 16:00～17:00【予約なしでも構いません】

■場所 ○月・水曜日 民主・市民クラブ議員控室(福岡市議会議会議棟 11階) TEL.092-711-4736

○火・木・金曜日 玉井てるひろ事務所(早良区野芥 3-26-7) TEL.092-405-3000

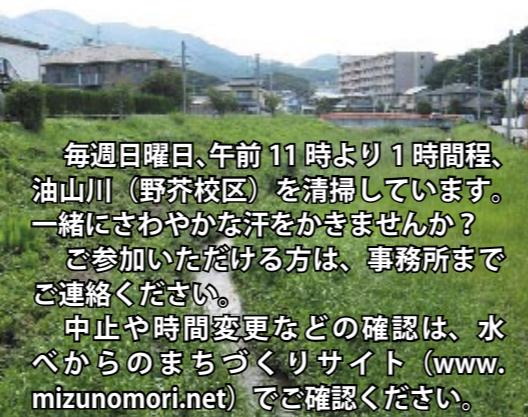
● 玉井プロフィール

1951年生まれ
1967年 附属福岡中学校 卒業
1970年 福岡県立修猷館高校 卒業
1975年 京都大学工学部建築学科 卒業
1977年 京都大学工学研究科建築学修士課程 終了
1977年 福岡市役所 勤務 (1989年まで)
1978年 福岡県庁舎の保存再生を進める会 代表 (1981年まで)
1988年 アメリカ、プリンストン大学修士課程 終了
1989年 アメリカ、ニューヨーク米国人 勤務
1992年 ケニア共和国、国立ジョモケニヤッタ農工大学 講師(1993年まで)
1994年 九州大学 非常勤講師 (1995年3月まで)
1994年 都市計画コンサルタント会社 設立 (現在まで)
1994年 博多まちづくり学校 事務局長 (1996年まで)
2000年 佐賀大学 客員教授 (2001年3月まで)
2003年 コンビニエンスストア 経営開始 (現在まで)
2007年 福岡市議会 初当選 (現在まで)



● 油山川定期清掃のお知らせ

毎週日曜日、午前11時より1時間程、油山川(野芥校区)を清掃しています。一緒にさわやかな汗をかきませんか? ご参加いただける方は、事務所までご連絡ください。中止や時間変更などの確認は、水べからのまちづくりサイト(www.mizunomori.net)でご確認ください。



● “1円さん” 平等配分論

10月8日決算特別委員会の総会質疑で、「予算額と事業実績を結びつけた経済振興」をテーマに質問しました。

今、アメリカでは、「エコノミック・ガーデニング」、市域全体を庭園のように考え、その中に存在している企業を草木と考え、その企業ひとつひとつを草木一本一本のように、丁寧に育てていく。地形に、気候に、インフラにふさわしい、地域に根ざした経済振興策が広がりを見せてきています。

大樹の下に、中木、低木、そして草花まで育てて、大きな生態(エコ)としてのエコノミーをつくりあげる。一時国が勤めていた産業クラスターづくりのような、学校、研究所から、インフラまで含めた大経済政策ではなく、もっと単純に、伸びている企業や商品をとにかく育てる。支援する前提はノウハウをオープンソースとして誰でも参入できる競争下に置き、群として事業を育て、企業を育てる。具体的で、大きな雇用力を育てる施策です。

福岡での経済活動を他都市よりも確実なものとするためのデータ整備

経済振興のための事業がたくさんあるのですが、その成果を測るデータが、国による少し遅れたものでしか準備されていません。政策によってどれだけ目標を実現できたかをリアルタイムで確認することが出来ないのです。リアルタイムでのデータ整備を質問しました。

国の仕組を理由にして、福岡ではどうしようもないと言うのは止めにすべき。計算法が公開されているならば、それを基に、統計学的に幾つかのデータを入力する程度で比較的容易に、ある程度信頼できる速報値ぐらいは算出できる。経済の実態を他よりもいち早く把握し、どこよりも早く経済を先導していく。先んじることで新しい経済の流れを呼び込む機会が拡大すると述べました。

福岡では的確なマーケット情報がないまま、思惑だけで不動産投資が進んだ結果、今年の基準地価下落率は全国でも最悪を記録しました。実態にそぐわない地価の高騰は、大きな痛手を経済に与えます。公的に福岡市のマーケット情報を整備し、誰でも使えるようにすることによって、投資も安定するし、経済政策も確かなものとなる。地域のマーケティングデータを公的に提供していただくことを要望しました。

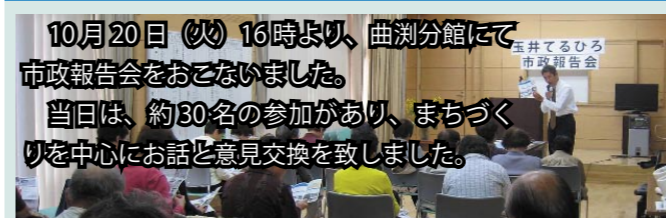
さらに、企業ひとつひとつを指導していく、商品ひとつひとつを売り込んでいくためには、マーケティングが解った専門家の力を借りなければなりません。専門家によるアドバイス、データアクセスを公的業務として肩代わりし、情報とアドバイス提供を政策としておこなっていくことを提案しました。

伸びているサービス・商品をもっと伸ばし、雇用力を高め、独自産業として育て上げる

いままでの産業政策は、業種ごとに支援していく政策でした。しかし、大きく経済が収縮し、その構造変化を迫られている現状の中で、唯一確かな、経済振興施策は、のびている企業・商品をのばすことだと思います。言い換えると、私たち一人一人が支持している、すなわち、現時点で売れているモノ(内需)をのばし、結果としてその分野の雇用を拡大させ、その分野の企業集積を図り、その地域の主力産業としていくことです。

伸びている企業・商品の支援策としては創業支援からセカンド・ステージ支援へ、施策の重点を移すべきです。さらに、企業の大きさや歴史などによらず、とにかく、市民の支持が高い商品をどんだんのばしていく政策を行うべきです。

● 市政報告会を曲渕で開催



曲渕校区で初めて市政報告会を行いました。自己紹介を兼ねて、これまでの政治や、まちづくりに対する思い、考え方を話した後、この10年で曲渕が良くなったかどうかを、伺いました。良くなった(8名)、悪くなった(3名)、変わらない(13名)の結果でした。道路や公共施設ができて便利になった。ループ橋ができて、車が

博多明太子は、商品を開発した人が、特許などせずに、製法をオープンにして、誰でも参入でき、競争できるようにしていたので、これだけの産業に成長したのです。決して“たらこ”や“唐辛子”の産地だったわけではない。作り方をオープンにして、他でつくっていない売れる商品をつくり、それをみんなで食べ続けただけなのです。売れる商品を競争下でつくらせて、自発的な改善のサイクルを定着させ、競争力のある企業群をつくりあげる。

のびている商品を大樹に育て、その下に、中木、低木、そして草花まで育てて、大きな生態(エコ)としてのエコノミーをつくりあげる。単純に、伸びている事業や商品をとにかく育てる。支援する前提はノウハウをオープンソースとして誰でも参入できる競争下に置き、群として事業を育て、企業を育てる。具体的で、大きな雇用力を育てる施策です。そのような観点から、群としての企業・商品をつくりあげることを提案しました。

事業効果を指標化し、予算“1円”、“1円”が同じ効果を上げるように配分する

経済振興局の平成20年度の37の事業に関して、成果指標をあえて決めてもらい、その成果と予算額の大きさが適正なのかを考えました。例えば、企業誘致にも、創業支援にも予算配分しているのですが、その配分額が適正であるか、果たしてどちらも必要なのか、どちらを優先すべきか、ということです。

これまでの政策は、国の事業メニューが提示され、その中から補助金を取れるのをやるというのが、自治体の政策でした。地方主権で政策を作り上げることが求められている今、地方で独自に指標を設定し、その指標の動きを見ながら、予算配分を適正化していくことが必要です。

そこで提案しました。ある年度、例えば2001年の時点での成果指標をすべて100とする。例えば、ある事業の指標が8件、別の指標が121万人であっても、おしなべて100として、各指標を作る。そうしたら、その指標の100からの変化の具合で成果を他の事業と比較出来るようになる。ある事業は成果指標が80に下がっている、ある事業はそれが150に上がっている。予算規模が同じならもちろんどちらに、“1円さん”を振り向けるかは明らかです。

さらに、100でそろえた指標を決算額で割る、一円当たりの効果(“1円さん”がどれだけ働いたか)を各事業で比較する。そうしていくと事業間の予算効果が比較できる。少し、詳しく述べると、まず、“1円さん”ひとつひとつが、どれだけ成果指標を獲得しているかを見る。そして、成果指標獲得数が少ない、遊んでいるかもしれない“1円さん”を、働き過ぎ、たくさん成果指標を獲得している“1円さん”の手伝いに向ける。言い換えると、どの“1円さん”も、平等に働くように、再配分する。そうして、初めて予算の1円1円が、平等に有効に働く状態で、そこで最大の予算効果を実現する状態に成るのです。「1円さん”に平等を！」が予算の配分のポイントになります。

結び

現状では決算の議論は、予算を無事に執行したかどうかで止まっています。適正な予算執行がおこなわれているか、きちんと市民へ伝わっているのか心配です。きちんと成果指標をつくり、成果と予算規模が適正であるかを確認することが出来るデータと作業環境を整えることが急務だと思います。



「市政報告会」
11月21日(土) 18時～ 脇山公民館
12月10日(木) 18時～ 内野公民館
「カッパ塾例会」
杉万俊夫京都大学教授「創造的昔帰り(仮)」
12月1日(火) 16時～ 早良市民センター
「新春の集い」
平成22年1月23日(土) ももちパレス
ぜひ、ご参加下さい。